

国際会議（ダイオキシン2008）に参加して

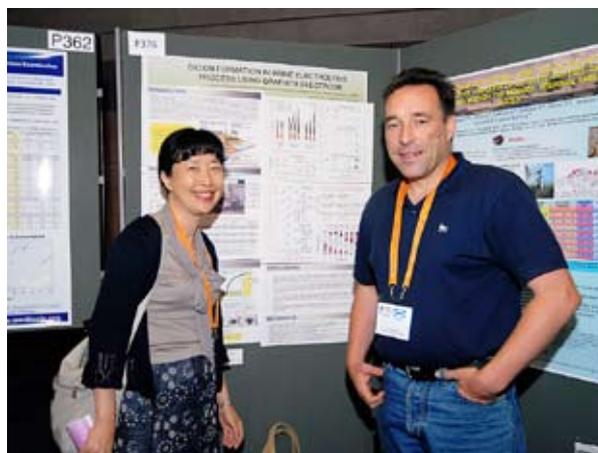
分析研究科 佐々木裕子

平成20年8月17日から8月22日の6日間、イギリスのバーミンガムにおいて第28回ハロゲン化有機汚染物質シンポジウム国際会議（ダイオキシン2008）が開催されました。バーミンガムは、ロンドンから車で約1時間半のイギリス第2の都市で、会場となった国際コンベンションセンター（ICC：写真左下）は運河に面した市の中心地にありました。本年は“未来を見つめよう～次世代に向けた展開”をメインテーマとし、環境残留性が高く、人や生物に蓄積し、有害影響が懸念され、地球規模の汚染が問題となっている残留性有機汚染物質（Persistent Organic Pollutants：POPs）について、世界各地の汚染実態や環境挙動、リスク評価、有害化学物質の除去や防止対策などを、46カ国の研究者が参加して最新情報について意見交換を行いました。当研究所では昨年東京で開催されたダイオキシン2007大会に続いて参加し、ポスター発表（写真右下）を行いました。発表はDIOXIN FORMATION IN BRINE ELECTROLYSIS PROCESS USING GRAPHITE ELECTRODE（日本語題：黒鉛電極を用いた食塩電解過程から生成するダイオキシン類）と題し、都内で判明した高濃度ダイオキシン汚染土壌の発生原因について、実証試験を行い、組成プロファイルなどから原因を検証した内容です。ドイツなどでも判明した類似の発生原因による汚染土壌問題についても、情報交換を行うことができました。

会議では、ダイオキシン類やPOPsに関する最先端の研究発表に加え、カネミ油症事件の40年間にわたる疫学結果やわが国の企業が起こした台湾の汚染土壌への対策など過去の問題事例が報告されました。特に、環境レベルや有害影響から、POPs条約の新規追加候補物質として審議が進められている臭素系難燃剤やフッ素系界面活性剤のセッションでは、当研究所でも取り組んでいる有機フッ素化合物について、カーペット、ハウスダストなど室内汚染問題から大西洋、太平洋の広域汚染問題まで幅広い報告が行われ、今後の研究の進め方にも有用な情報が得られました。



会場：国際コンベンションセンター（ICC）



ポスター発表：「食塩電解によるダイオキシン生成」ドイツの土壌のダイオキシン汚染問題の研究者との技術交流